

戦中・戦後の狭間で

大坪 幸平 (旧17回生)

われわれが岩手中中学校に在籍した当時は、徹底した軍国主義教育や学徒動員という暗黒な時代と戦後教育への転換の最中にあり、真の学問は入学当初と、卒業間近な期間のみである。

開学七〇年の歴史の中でも、旧制一七回生は、前期(戦時中の繰上げ卒業の名残りで四年修了で卒業)と後期(五年修了で卒業)の二年度に分れる変則なもので、同窓の諸兄から、この間の事情を聴かれることが多い。

入学時に数名の留年者から上下関係の予備知識を得たものの、応援歌練習や学年末に講堂の羽目板に掲示される成績表が上級生になるほど、末尾の氏名が破棄される状況に、先輩の威厳に触れた感を強くしたものであるが、運動部の活動を通じて得た上級生の温情と、石桜の気質が、心の支えとなっている気がする。

昭和一八年と記憶するが、食糧増産の一環から矢巾町の農家に分宿して暗渠排水工事に狩り出されたのが学徒動員の嚆矢で、時を経ずして久慈町(現久慈市)の川崎製鋳長内鋳

山の砂鉄露天掘作業に従事したが、慣れない作業のため、土砂を満載したトロッコのブレーキ位置を誤って何人かの同級生が病院の厄介になった苦い経験もある。

春の淡雪が降り注ぐ盛岡駅頭から横浜市金沢文庫駅に降り立ったのは、戦況も不利な状態になった頃で、横浜駅構内の天井から空が見られる異様な風景であった。

寮において最初に見たのは、昼食として出された赤飯らしき物体で、寮母が動員を祝って呉れたのかと感激もしたが、三日も続けば疑問が出るのが当然、実は高粱飯と判り一同啞然としたものの、日一日と量も減り、混入されている粉を皿の周囲に並べて見ては悲嘆にくれたものである。

余りの空腹に耐えかねて銭湯の帰り道に玉葱畑から一寸失敬して、洗面器で煮炊きした豪の者も出たが、付近の人の「岩手から来ている生徒達」と大目に見て呉れた厚意は今でも感謝している。

二〇年三月一日に文庫近くの神社に集合させられ、統導の東教師の口から空襲によつ

て全滅したと告げられ、一瞬耳を疑ったが、数日後に誤報であることが判明し大騒ぎしたこと、夜勤しながらも機関銃の部品製造したこと等枚挙に暇がないが、寮生活を通して同級生の横の連携が深まっていた。

二〇年六月頃から交替で帰省が認められたが、病気を名目に横浜に戻って来なかった者が出たのもこの頃からであった。

当時、空襲も激しくなり防空壕に避難する回数も増え、そのつど、工場と連絡に狩り出されたが工場の足立伍長と走っている途中で米機の機銃掃射を浴びたこともある。

終戦によって学校に戻ったものの、教科書もなく、一人二人と予科練から帰って来た学友が増えるつど、軍隊生活の苦労話や将来について思考する日が多くなった。

勉学より最先に運動部の復活が論議され、伝統あるラグビー部やアイスホッケー部が活動を始めたが、盛中の野球部が動き出したという情報から負けず嫌いな、山崎敬一・瀬川(現山口)忠・西村亮・長谷川陽一君等が集い、野球部を創設し、どこから持って来たのか解らないが、練習が終われば全員でボールの補修に明け暮れる毎日で、初戦に医専グラウンド(上田)で、盛中に大敗したが血気盛んな青春を謳歌したものである。

当時の教師は、ユニークな一面を有してお

り、話題も豊富であるが、卒業式後に教員室で小林博（通称ロツパ）先生から「華命の最中」という色紙を頂戴したが、その後の人生

で大きな指針となっている。
戦中・戦後の激しい時代に終始したが、同級生間の横の関係はより強固なものであると

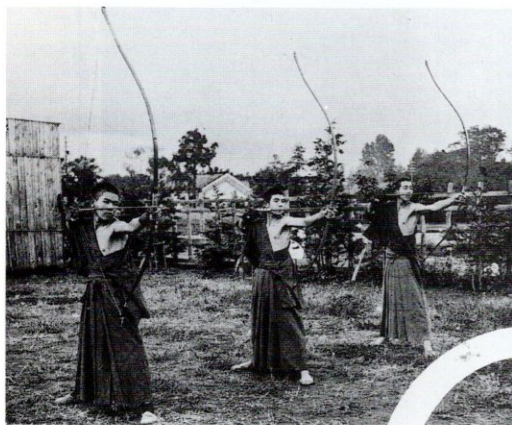
同時に、他校に見られない上級生、下級生の協力関係は私立の強みと思われ、今後もより強い絆となって欲しいものである。



下校途中で
(ゲートルに下駄履きも昭和16年)



運動会の変装レース（昭和9年）



弓道部の練習（昭和14年）



盛岡市内一周マラソン競歩
(桜山神社前で昭和16~17年)



応援団幹部（昭和13年）